The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「高瀬舟」と「虱」の比較を中心として
Author(s)	山本, 捨三
Citation	語文. 1954, 12, p. 14-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68455
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「高瀬舟」と「虱」の比較を中心として

山本捨三

最近新中国の作家郭沫若氏の短篇「波」[1]（菊地三郎氏訳）を読み、ふと比較文学的意識の中に浮んできたのは森鷗外の「高瀬舟」と芥川龍之介の「虱」であつた。（同様のことは巴金氏の「砂丁」[2]（村田孜郎氏訳）と夏目漱石の「坑夫」との間にもある。）この三作は構成上ともに船上の出来事に取材してをり、このやうな背景の類似の中にどのやうな構想でどんな人間、社会が描かれてゐるか、表現を裏づける作者の人間観とか社会観とか表現方法とかを検討比較してみたく心ひかれたのであるが、高瀬舟・虱より二十六年遅れ、新しい世界観に立つ、この新中国小説との比較は一まづ他日に譲り、今回は専ら「高瀬舟」と「虱」との対比的考察を中心に、鷗外、芥川の小説的方法、創作意識上の両人の相互的交渉、人生観乃至表現手法上の特徴などについてしばらくメスを揮ふことにする。まず両作品の内容的形式的比較を要項的に示すを便とする。

	高瀬舟	虱
発表	大正五年一月（中央公論）	大正五年五月（希望）
脱稿	仝　四年十二月	仝年　三月
典拠	翁草、流人の話	加賀藩古老からの聞話[3]
主要人物	罪人喜助	御徒士森権之進
	同心　羽田庄兵衛	仝　井上典蔵
場所	高瀬舟の中（高瀬川）	長州征伐の金毘羅船の上（安治川口）
時代	江戸寛政の頃	幕末元治元年末
主題	幸福は欲望に対する諦念（節度的自足）。	無意識のヒロイズムとその附和雷同の滑稽。
形式	附、既成道徳への疑問。寓意小説的（歴史離れ）	寓意小説（諷刺的テーマ小説）

一　ヒントの問題

芥川の「虱」は右のやうに「高瀬舟」に遅れること僅に三・四ケ月である。この位の時間の隔りは芥川が「高瀬舟」にヒントをえて「虱」を構想し書きあげるにちようど頃あひのやうに思へる。この前年の大正四年九月彼は今日からみても劃期的な「羅生門」を「帝国文学」に発表し、ついで漱石の賞讃を浴びた出世作「鼻」を五年二月第四次「新新潮」創刊号に載せた。このやうに油の乗り出した芥川がさらに「孤独地獄」「父」を挿んで、人間及び社会の戯画化の諷刺小説「虱」を「高瀬舟」のヒントの上に仕上げることは方法的にも内容的にも了解に苦しまない。こゝで「高瀬舟」が前者のヒントになつたといふのはまづ冒頭の対比—場所、人物、時代—でも

分るやうに、創作手法の相違にも拘らず、シテュエーションの設定や素材の布置に多分に類する所があるのみならず、小説形式の類似や後に説明するとほり内容的に大正初年の社会問題生活問題に対する批判を寓意した。創作態度や主題選択における共通性を示すからである。

「風」は一見歴史小説的形式を粧ってはゐるが、その実寓意的テーマ小説であり諷刺小説である。（テーマ小説の形式は菊池や芥川など新思潮派がこのころ意識的に開拓した新形式である。）彼の王朝物やきりしたん物などはなるほど歴史上の諸人物を取上げ、歴史的考証を以て綿密に背景（社会状態や風俗）の描写を行ひ、まさにその時代の人間や事件らしく描写してゐる。しかしそのやうに用ゐられる歴史が実は主として現代の現実的問題の発見の場所、その芸術的表現の方法に過ぎなかつたことは、その実作品や言説を通して察知できる。即ちその歴史取材は史的真実の追求とか史実の再現を求めるものではなく、主観的に歴史を現代化するところの、いはば思想の扮装[4]として借用されたものであることは今日異論がない。まさに「羅生門」を始めとして「芋粥・奉教人の死・或る日の大石内蔵之助・戯作三昧・地獄変」なでみなさうである。そこには現代的思想・心理に仮托した人間があるばかりである。芥川の投影である「西郷隆盛」（大正6）中の老史学者は「僕は歴史を書くにしても、嘘のない歴史なぞ書かうとは思はない。唯如何にもありさうな、美しい歴史さへ書ければそれで満足する」と、主観的な芸術的史観を述べてゐるし、過去取材の態度を聞かれて次のやうに答へた芥川の言葉は一層その辺の事情を明かにしてゐる。

今僕が或テエマを捉へてそれを小説に書くとする。さうしてそのテエマを芸術的に最も力強く表現する為には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけ、今日の日本に起つた事としては書きこなし悪い。（中略）この困難を除く手段には（中略）昔か（未来は稀であらう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起つた事とする外はない。僕の昔から材料を採つた小説は大抵この必要に迫られて、不自然の障害を避ける為に舞台を昔に求めたのである。（澄江堂雑誌、昔）（加点筆者）

即ち現代的テーマの芸術的自然化のために歴史的過去が使用されたのである。そこに寓意があるのは当然である。

鷗外の歴史小説は「歴史其儘と歴史離れ」（大正4・1・心の花）の所説によつて、「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念を発した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた」ところの歴史の自然に基く歴史其儘の小説と、「わたくしは歴史の『自然』を変更することを嫌つて、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしは此縛の下に喘ぎ苦んだ。そしてこれを脱せようと思つた」ところの歴史の中に創作的想像の自由を求める歴史離れの小説の二種に分けられる。歴史離れを求めた最初の小説は「山椒大夫」（大正4・1中央公論）である。「高瀬舟」もまたその系統に属する、否、その極限を示すものであらう。創作的な想像力の自由を駆つたこの作品は、古話の史的事象を借りて、現実の生活問題をテーマ的に追求する、それだけ歴史からみれば寓意的な傾向を多分に帯びてゐる。歴史の現代化—歴史離れ—が目立つのである。このやうな「高瀬舟」を新進のテーマ小説家たる芥川が見逃さなかつたのは当然であらう。岩上順一氏がこれを作者の現代批評の直接

の表出—歴史離れの最後の極限とみ、[5] かつ鷗外はこゝで現代小説への道を自覚したらうが、そのまゝ自己の本道として歴史文学（考証的史伝）に没入してしまつたといふのはその通りであらう。さういふ時、鷗外の後を追ひつゞけたのはまさに芥川の歴史を借用するテーマ小説であつた。—かの「羅生門」以来。（今昔物説・宇治拾遺物説の両者所収の説話に現代的解釈を施した「羅生門」は鷗外の「山椒大夫」及び歴史離れ理論に後れること八ヶ月である。）更に鷗外文学と芥川小説との関係をみるに、「羅生門」以後においても、芥川の処女作「老年」（大正3・2）の老残の心境は、鷗外「百物語」（明治44）の主人公凋落の飾磨屋にどこか通ふものがあり、馬鹿踊りの最中墜落して細い息の下から「面を……面をとつてくれ……面を。」と遺言する「ひよつとこ」（大正4）は、鷗外の厳粛なニイチェ的「仮面」（明治42）を芥川的な悲喜劇的人生諷刺で変容へたものであるともいへよう。またこの中間の「青年と死」（大正3）においても鷗外諸作（ばかりではあるまいが）の生死観と縁なしとはすまい。

このやうに芥川の小説は最初から鷗外のそれと不思議な交渉をもつてゐると想定できるとき、芥川の時代的なテーマ小説（王朝物、江戸物、きりしたん物など）を鷗外の歴史離れの系譜的発展物であると規定することは困難ではなからう。さらに一歩進んで、その本質を鷗外の極限から出発した、歴史を思想の扮装として利用した現代のテーマ小説（寓意小説）として規定することも。

芥川は大正四年十二月漱石の門下生となり、漱石の文学的影響を多く滑稽・皮肉・諷刺・ユーモア・エゴイズムの解剖等に見せたが、一方このやうに鷗外の影響も少くない。日本の自然主義作品を退屈として退けた彼が尊敬に償する主知的作家は当時この二人しか見あたらなかつた。

ところが「高瀬舟」と「虱」との関係とは逆に、「高瀬舟」と「羅生門」との間では、主題的思想的に芥川の羅生門の方が先駆であり、鷗外にヒントを与へたのかも知れない。「羅生門」の発表は「高瀬舟」に先立つこと四月である。勿論鷗外は生活的飢餓の問題で主題的に羅生門に通ずる「大塩平八郎」一揆をその前年大正三年に書いてゐる。しかしこれはその所謂歴史其儘系の小説で、主観の自由を発揮する寓意的テーマ小説の形式はまだ意図されてゐない。芥川においても「羅生門」は我田引水的にいへば鷗外の「大塩平八郎（内容）＋山椒大夫（形式）」であつたかもしれない。客観的にそのやうな推定がつくのであるが、その「羅生門」が飢餓の問題——その社会的解釈、及び人間の欲望の点において再び鷗外を捉へると同時に、歴史離を彼の極限において刺戟するところの羅生門の創作態度に関心せしめ、この「高瀬舟」を創作せしめたのではないかとも思はれる。発表当時未だ世評に上らずといはれる羅生門ではあるが、恐らく鋭敏な鷗外の目を驚かせたものと思ふ。（この点を裏書きする文献を寡聞のためもたないのは甚だ残念であるが羅生門の発表が帝国文学であつたところから推しても）池辺義象校訂本「翁草」巻百十七「流人の話」[6] から「高瀬舟」を構想した鷗外の心意を筆者はこのやうに羅生門との関係において推測した。（原文は「縁起」にいる通り一頁足らずの話であるのを約十数枚にし、無名の罪人を象徴的に喜助と命名し、無名の一同心を庄兵衛と命名したのも作者の歴史離れである。なほ庄兵衛の名は同書の次の話に出てくる通海の賊日本左衛門の本名浜島庄兵衛の名の借用と思はれる。）

かう考へるとき、老婆の強奪の論理が忽ち下人によつて復讐される所に「羅生門」の一命題（餓死の前には道徳を見失つて暴力に駆られる人間のあさましさ—生の衝動的動物的欲望—の現実と、人間性の立場からする批判）を読取つたであらう鷗外が、芥川的な解釈（主題）に対置するものとして、彼の生の理想—人生の幸福は無制限な欲望の自制即ち節度的諦念にあるといふ—を喜助に造形したと解されよう。客観的にはまさにそのやうな対置がある。その節度的自足はとりもなほさず鷗外の古典的諦念のイデエの表現に外ならない。

要する本稿の課題「亂」は直接鷗外の「高瀬舟」のヒントに成立したが、その高瀬舟はまた芥川の「羅生門」にヒントを負ふといふ交互作用を認めずにはなられない。しかも芥川のその後の「鼻」「芋粥」も主題的に—欲望の諦念において—「高瀬舟」と共通性を有する。ただその間に鷗外の古典的諦念に対する、芥川の逃避的諦念の対比を見るが。そのことは次項に譲らう。

二　思想性の比較

ヒントから見て極言すれば「亂」は右のやうに「高瀬舟」の換骨奪胎ともいへよう。しかしその主題設定にはたらく作者社会感覚・心理作用・人生批評や表現手法の特異性は明かにまた別個の独自性を帯びてゐる。そこでこゝでは小説が一つの人生批評であり、形象的思惟の文芸であるといふ本性から、両者の主題とそれに伴ふ各の思想性（一にも少しく触れたが）について更にしばらく対比的に考察を続ける。

先ず鷗外の高瀬舟は高瀬舟縁起（大正5・1、心の花）によれば、人生と社会の二問題—財産の観念とユウタナジイ（医学上の安楽死説）の考—を「翁草」の一話に発見して構成されたものである。そこで主題は前者から人間の財産に対する無限の欲望を自制する「節度ある自足」、即ち財に対する「古典的諦念」のイデエ—これは鷗外の根本的生活原理—を中心として、僅か銅銭二百文の官給金に満足する貧窮の罪人喜助にこれを形象化し、後者の考からは護送役の同心羽田庄兵衛の法定—「既成道徳」—と「人間性の自然」との矛盾に関する疑問の提出を構想せしめ、どちらかといへば自然な人間性護持の方向に思考してゐる。（喜助は瀕死の弟の苦痛を救けてやるつもりで即ち善意から自殺の剃刀を抜いてやった。弟は安らかに死ぬ。しかし法廷は彼を罪人として—翁草では死一等を宥めて—裁かねばならなかった。）喜助は死罪を宥されて遠島になる。しかし医学上の安楽死説からみればこれが罪であらうか。そこに作者の疑問があった。

従来の道徳は苦ませて置けと命じてゐる。しかし医学社会にはこれを非とする論がある。（中略）これをユウタナジイといふ。楽に死なせるといふ意味である。高瀬舟の罪人は丁度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。（縁起）

これは作者の思想が世間の固定化した法律道徳の既成観念を人間性及び科学的自然の立場から、少しでもその方向へ打開してみたいといふ内心の要求を表明したものであらう。それはかの歴史の自然の尊重に対応する人間性の自然の回復と科学的自然尊重の精神を示すものである。（これをおしつめると「自然と道徳」[7]の問題になるがこゝでは深く追求しない。）このやうに既成の道徳観にとらはれず、その止揚として道徳と学問（科学）、道徳と芸術との綜合を求め

る態度は終生鷗外に一貫した「自由と進歩と高き秩序」の綜合といふ生の理想世界観に由来するものである。「沈黙の塔・ファスチェス」(明治43)などでは積極的にこの思想が主張されてゐる。

芸術の認める価値は、因襲を破る処にある。学問だつて同じ事である。学問も因襲を破つて進んで行く。　(沈黙の塔)

かやうに「高瀬舟」は主題的に、(1)生の理想 ― 不合理な人生の不幸を超克し、幸福に転化する根本的理法 ― として節度的自足(欲望の自制)＝古典的諦念を強調し、(2)社会的理想としては既成道徳観の革新を志向して自由と進歩と高き秩序の調和を提示したものといへよう。特にその節度観は彼の素性及び教養から武士道的、儒教的性質をもつやうに思はれるが、西洋的教養をも卓出して持つた彼としてみれば、それはまさしく古来の東西両洋の先哲たちが示した所謂哲人的節度の類といふのが最もふさはしいであらう。それ故鷗外がこの作品に形象化寓意化した欲望自制の諦念のイデェは彼が住した現代は勿論、凡ゆる過去未来に通ずる「現実的にして永遠的・普通的」 ― 古典的 ― な充実した生活の原理であつた。

喜助の僅か銅銭二百文に対する自己満足(貯蓄・財産・資本として)は浪漫的もしくは資本主義的欲望無制限の思想学説からみれば余りに消極的である。しかるに翁草に拠つて作者が敢てかう表現したのは、「銭を持つたことのない人の銭を持つた喜びは、銭の多少には関せない」(縁起)といふ心理解剖と、「人の欲には限がないから、銭を持つて見ると、いくらあればよいといふ限界は見出されない。二百文を財産として喜んだのが面白い」(仝上)といふ欲望の古典的諦念といふ主題の発見にるのであるが、この諦念の社会的意義を考へる場合二つの面が現れる。一つは貧者の僅かな富に対する満足を強調する現状満足の宿命的諦めの消極面と、一つは巨大な富、金権に対する抵抗感の積極面とである。その何れに焦点を作者がおいたかは前述の所で想像できよう。いふまでもなく後者である。それは無限の欲望を支柱とする資本主義的学説思想 ― 例へば人間の経済行為の基本原則を欲望の最大限度の充足の努力におく限界利用学派など。(三木清編現代哲学辞典・経済学九四頁) ― に対する彼の批判であり、抵抗であつたと見なければ、鷗外の古典的諦念は忽ち崩解するであらう。まさに喜助の生きた時代は徳川封建制度下に商業資本主義の上昇する市民社会であり、市民の多数は富の蓄積増大を夢みかつ理想としてゐた。しかも喜助のやうな生活に追はれる下層労働者市民、同じく庄兵衛のやうな下級官吏は遂にそのやうな夢を実現しえない機構にあつた。喜助とその作者との時代では江戸と大正との相違がある。この作品の成立した大正初年は第一次世界大戦(大正3―7)の影響で日本の資本主義経済が急激に発達して、独占資本主義[8]の階級に到達した。両者の間にはこのやうに資本主義機構の発展段階としては懸隔をもつが、その根抵が資本主義的たることにおいては共通してゐる。鷗外の現実的批評眼は自然この共通性の上に立たざるをえないのである。この事情がこの歴史離れの小説を近代的生活問題社会問題の寓意的小説たらしめ、作者の近代的批判精神の表れ場所とせしめたのである。その方法はつまり歴史の近代化である。喜助の諦念以前の問題として、失業苦、働いても働いても食へない貧窮生活、その結果喜助の弟の自殺、働く時は常に右から左で、入牢中働かなくて食はしてもらつてその揚句遠島の支給金をえるといふやうな社会的矛盾、同心庄兵衛もまた日々のやりくりに追はれてゐる人間といふやうな日常経済生活の矛盾が

描かれねばならなかつたのはこのためである。鷗外自身は当時五十五才の陸軍軍医総監であり生活困窮はなかつたが、（それだけ上からの見方であつたが、）常に社会の動向に対して鋭敏な眼[9]を有する彼が軍人として一応社会から離れた傍観的自由をもえて、社会の現実に対して冷静な批判の眼を優位的に持ちえたことも否まれない。近代資本主義の最も深刻な矛盾、即ち資本の蓄積が貧困の蓄積[10]を生む現状、そこから愈近代的性格をもつて生れてきた労働問題、アナーキズム等の思想問題の批判、更にその主体的解決の必要の痛感から、貧者への同情にあわせて、資本主義への知性的抵抗、及び当時の左翼的社会主義思想の中心アナーキズム[11]の批判として、右のやうな古典的諦念を彼自身の主体的問題、社会的対決のイデエとして表出せずにはゐられなかつたのである。しかるにこのやうな「高瀬舟」をもつて彼の歴史離れ小説がこゝで完了したといふことは、生の主体的問題としてその古典的諦念の自覚が頂点的に達成せられたことを意味する。高瀬舟脱稿（大正4・12・5―日記）の直後、その発表と同月より続々連載され始めた「渋江抽斎」以下の史伝物の余裕綽々たる労作の没頭ぶりはまさにこのやうな心的過程によるものといふべきであらう。

鷗外の古典的な諦念や抵抗感は恐らく今日でもまた未来社会でも揺るぐことのない高度な理想であらう。しかし「高瀬舟」を読む今日の読者のすべてがそのまゝ直ちに共鳴し肯定するとも思へない。不満を覚える者はかゝる理念到達以前に必ず解決しなければならぬ現実問題を複雑な階級的分裂の現代社会に重視するであらうし、またこれとも異る思想や人間観をもつでもあらう。たとへば、鷗外の真意ではあるまいが、高瀬舟のやうな精神的理想がもし喜助のやうな不幸な貧困者にのみ要求されるなら、それはまた見逃し難い社会的矛盾の連続に過ぎない。即ち「高瀬舟」の作品性の前にはまだまだ現実的課題として新しい小説的・人間的諸問題が残されてゐたし、ゐるわけでもある。「羅生門」以来の芥川のテーマ小説もその一つであれば、さらに激烈な階級闘観に立つ正末昭初のプロレタリア小説などもまたその一つである。

翻つて芥川の創作方法においてはまさに歴史は思想の扮装、傀儡であり、思想表現の手段であつたことは前述の通りである。こゝに鷗外の歴史離れの徹底があると同時に歪曲もある。いま芥川の「虱」の表現性をそれ以前の作品との聯関において見ると、「羅生門」と「鼻」の両面が浮んでこよう。即ち前者からは不合理な人生に現れざるをえない争奪の行為とこれに対する批判、後者からは戯画化の手法と諷刺の中にこめた生の回避的態度である。（この二作はともに歴史の仮装に立つテーマ小説であるが、後者には特に諷刺的手法戯画化的方法が著しいことが特徴。）そしてこの人生の闘争争奪面は、先駆者・急進派を代表する森権之進と、虚礼因襲墨守の偽善者・保守派を代表する井上典蔵との抗争及び二人に附和雷同する群衆に構成されてゐる。諷刺戯画化の焦点は彼らの笑ふべき虱への執着と争奪（人間の愚昧・滑稽のシンボル）におかれ、最後にその彼らに全く無関心な社会の非情な進展の中におかれてゐる。

旧暦十一月下旬寒風に曝された船上で、体温をえる窮余の一策として、「虱狩るべからず、飼ふべし」と奇説を主張躬行する森。身体髪膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始と孝経の教を墨守して、「虱狩るべし、飼ふべからず」と反対し虱をみな食つてしまふ井上。常識の埒を越えた二人の滑稽な奇説 ― そこに作者はヒロ

イズムの愚を諷する — が次第に支持者をえて愈対立し、飼ふ、狩るの争奪はつひに虱、虱と叫びつゝ両派の刃傷沙汰にまで及ぶといふ社会的人生の戯画諷刺はそれ以前の「鼻」や「父」以上に社会的テーマ小説の形式を帯びてゐる。このやうに小説的効果をねらつて誇張的に人間社会を滑稽化する芥川の諷刺精神は冷い理智に立つて人間の愚を嘲笑するのであるが、その裏に人間の弱点を憐れむ憐憫[12]の温い心をも蔵する。このやうな人間的表現は、余りにも人間的なものを求めてやまなかつた芥川の真意を汲むに十分である。一方に偶像の破壊と英雄の否定、そしてまた一方に偶像・英雄にひかれる人間心理の理解[13] — かうした矛盾相関の人間解釈は凡ゆる人生は不合理に立つてゐると見抜いた芥川の根本思想であり、その諸作に一貫してゐる。例へば英雄化された大石、偶像化された芭蕉を卑小化し人間化する「或る日の大石内蔵之助」「枯野抄」、クリストをジャーナリストだと警句するアフォリズム（侏儒の言葉、西方の人など）はみなその現れに外ならない。このやうな生、人間の理解が根本的に彼の抱きつゞけた善悪相関の思想に由来することは後に説かう。

芥川は「羅生門」で社会の現実的生活問題殊に餓死に直面する最下層の失業者や浮浪者を取扱つた。餓死か盗みかのぎりぎりにまで追詰められた人間の生を。餓死脱出の許さるべき手段として老婆も下人も他人の所有の剣奪を遂行する。この暴力的醜悪行為はまさに、凡ゆる人間は飢の前には暴力的行為に駆立てられるといふ命題（下人の行動）と、かゝる暴力は論理的自己矛盾[14]にあつて報復される（下人に倒された老婆）といふ命題の二つを含んでゐる。これはともに（鷗外の高瀬舟の場合と同じく）大正初年の労働運動社会主義思想におけるアナキズム的行動・理論（テロリズム）に対する芥川の批判的寓意とみられる。

失業の果て、餓死か盗みかの前に迷つてゐた下人は、死人の髪を抜取る老婆を見るや、悪に対する憎悪と怒りで老婆を組伏せる。

しかし老婆が、仕方なくてすることだ、この死人もやはり悪いことをしたのだから大目にみてくれるであらう。といふ言葉を聞くや否や、忽ち猛然と老婆の衣類を強奪し去つた。

この悪（強奪）の循環は、「財産は盗奪である」[15]と考へたかの無政府主義者プルードンの思想に全くあてはまる。芥川はそのやうな現代的批判をあの今昔物語の説話（第二十九、本朝附悪行、羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人の語）の中に見たのだが、芥川のこの作品における人間的立場の根抵は善にあらう。最初下人が抱いた盗奪の考に対する逡巡、老婆の悪行を見た瞬間の憎悪と怒りはまづその事を示してゐる。さらに下人に復讐された老婆の論理の自滅もまたさうである。しかし一方老婆の悪行、下人の最後の衝動的暴行をも人間獣の悲しき所業[16]として認めざるをえない考 — 人生は諸悪そのものである —。及び憐憫の情もある。即ち悪の否定と肯定とが綯交つてゐる所にこの小説における芥川の人間侮蔑と憐憫との分ちがたい複雑な人間解釈が見られる。この悪の否定と肯定との相関的相則的思想こそ芥川の所謂善悪相関の思想である。「自分には善と悪とが相反的にならず相関的になつてゐるやうな気がする。」（大正三年一月二十一日恒藤恭氏宛）[17]この善悪相関の具体者である人間が人間獣として映り、人間の生活力は実は動物力の異名に過ぎないと考へられ、人間的な余りに人間的なものは大抵確かに動物的である（侏儒の言葉）、人生は地獄よりも地獄的である（仝上）と感じられたのはこのやうな人生観の所持者たる彼にあつて当然の事であら

う。「羅生門」の老婆や下人はまさにそのやうな世界である。人間獣の考を抱き、悪に鋭敏でありながら、しかも「争闘をいとはしいとした」[18]芥川はすでに早く人為なる道徳に対して懐疑的であり、人生に虚無的な絶望を感じてゐたのである。羅生門の最後「外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである」の一句はそれを思はせるに十分である。このニヒルと絶望とに交る人間的な憐れみ ― そこに人生に対する彼のいひがたい憂愁がある。みよ、彼はその心底を次のやうに書きとめてゐるではないか。「君看雙眼色　不語似無愁」(羅生門の扉の句)自己暴露をおそれた、それだけ聰明にして痛ましい彼の心魂がのぞいてゐる。

芥川の筆が一生鷗外の喜助や、ぢいさんばあさんや、安井夫人、娘いち(最後の一句)などの古典的或は純粋憧憬の人物を書きえなつたし、書かうともしなかつた理由は、実にこの善悪の相関的制約性にしたがつて道徳に対する懐疑心の抱泥と、更にこれと理論構造を一にする美醜の相関的制約性の[19]思想・感覚に起関するものであらう。

「羅生門」の地獄的世界から一層道徳的要素を捨象し、専ら知的心理的にヒロイズムによる党派的闘争の無意味滑稽を諷刺戯画化したのが「虱」である。こゝにはいつの社会にもおこりうる Précurseur(先駆者)と Pharisien(偽善者)との抗争が滑稽化して描かれてゐる。彼らの主張や行動は社会の客観的歴史的進展から浮上つた笑ふべき愚劣と無意味の表象として、芥川はこゝに人間の嘲笑すべきと同時に憐憫すべき宿命を見た。鷗外が「高瀬舟」に人間の驚異すべく同情すべき本質を見たに対し、

五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事(彼らの刃傷沙汰)には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風にひるがへしながら、遙々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空を、西へ西へと走つて行つた。

この頓着しない金毘羅船は人間を内包する社会 ― 巨大な機械に比せられ、そのやうな自動力をもつ ― のシンボルである。寓意である。そのやうな機械とは人間の所産でありながら逆に人間を無視し締出し自動する近代文明の非情な物質力である。強大な生産力であると同時に失業群を生出す怪物である。時恰も世界大戦の好況で急騰する日本重工業の王者である。かくしてメカニズム化した社会は冷静な機構力をもつて浮上り取残された人間どもを後目に自ら進展する。このやうな近代社会のメカニズムを芥川は金毘羅船に寓意したと思はれる。森や井上はそのやうにメカニズム化した社会から浮上つた無用物もしくは虱のやうな寄生物として諷刺されてゐる。そしてこの誇張された先駆者には当時の急進的思想家・学者・過激な社会運動家が、偽善者には退嬰的思想家・学者・反動的保守家一般が寓意されてゐたとみるべきであらう。しかもそこに彼は前述の嘲笑と同時に憐憫を見たのである。芥川の冷智は常に人間的なるものを結局動物的とみる故にまづ自己嫌悪に陥ると同時に人間一般に対する人間侮蔑の感に捉へられずにゐられなかつた。同時にまたその弱点の故に却つて人間をいとほしむ温情を持たずにはゐられなかつた。このやうな矛盾相即の人間解釈生の理解の主知的表現方法として諷刺、戯画化の方法が選ばれたのは当然である。かゝる方法におけるその冷智温情の渾然融合した表現を「鼻」「芋粥」の悲喜劇的泣笑ひの人生の形象に見出すが、「虱」の場合はむしろ理智に勝ち、滑稽の誇張の過大さが目立つ短所を示してはゐるが根抵は共通

してゐる。

更にこのことは「鼻」以来彼が闘争をいとふ結果生の逃避を企てたことに根源する。彼の倫理観はすでに「羅生門」以前より善悪相関の思想に立ち、道徳に対する懐疑もしくは善悪一如の東洋的諦観 — しかしながら近代的苦悩に絶えず脅かされながら — を示してゐるが、これは彼の一生を貫くものであつた。恒藤唐木両氏の所論のやうに、善悪を相反とみればこそ、両者闘争の必然性・道徳的善追求の戦ひが意義づけられる。しかるに両者の対立断絶を見ない善悪一如の同時的相関の観方においては倫理的闘争は無意味化されずにはゐないし、勝敗の攻利性もまた零化され、闘争はすべて厭悪される。かくて凡ゆる闘争は理智的に滑稽として観ぜられると同時に、動物的本能の現れとして憐憫される。しかし道徳的闘争意欲の欠除は自然に生の逃避的傾向に傾き易く、その結果人間は道徳的存在としてよりも心理的生物的存在としてのみ理解される。「鼻」以下の諸作はまさにそのやうな道徳的懐疑と生の逃避意識が生出した人間心理の解剖図である。しかも愛の中にすらエゴイズムを見（大正四年二月二十八日恒藤恭氏宛書簡）、恐らくすべては泣き笑ひで見るべきものかもしれない（同年推定同氏宛書簡）といふ、利己的にして悲喜劇的な人生の心理的解剖図として、「芋」の表現もまたかゝる性質をはつきり持つてゐる。恒藤氏によれば彼の道徳的本能は人一倍強かつたが、終生の懐疑主義は作家たる彼をして晩年絶望的に、「僕は芸術的良心を始め、どういふ良心も持つてゐない。僕の持つてゐるのは神経だけである」（歯車）と言はしめたのである。かくて生の回避の眼に映る人生は唐木氏のいふ（作家論、芥川龍之助）パスカル的な慰戯の人生[20]として観照される。とすればこのやうな人生を観照的に表現する適当な方法としても、戯画化、諷刺の方法が諸作に選ばれた理由がまた手易く理解できるであらう。（初期の「ひよつとこ」「鼻」から晩年の社会諷刺社会戯画の名作「河童」にいたるまで。）

社会の現実的問題に直面してこれに対決する自己の古典的諦念のイデエ — 欲望の自制自足 — を寓意した鷗外の「高瀬舟」の思想性が今日ではいろいろの問題を含むとしても、はるかに超時間的な古典的永遠性を有するものとして理解されるに比して、同様の現実感から同様の主題 — 欲望の諦念 — を設定した芥川の「鼻」「芋粥」などの思想・イデエが何か宿命的な不安感と脆弱感とをわれわれに与へるのは何故だらう。その原因を根本的に探ると、結局渾智内供や五位の生を逃避的慰戯的に観照する作者自身に内在する積極的意志を欠いた生に対する逃避的諦念に起因するものといふ外はあるまい。

芥川の欲望に対する諦念は、人間の幸福は理想や願望を心の中にそつと抱いてゐる間にあつて、それが実現されると忽ち幻滅の悲哀に陥らざるをえないといふ生の不合理に対する心理的解釈に基いてゐる。また更に当時の唯物史観的社会革命思想の批判としてみれば、人間の幸福は人間性に内在する根源悪的なものが変革されない限り、人間の外部的（内体的又は経済的）条件 — 内供の長鼻や五位の境遇の変化などがそれを象徴する — 変革だけでは彼らのいふやうに容易にえられるものではないといふ人間解釈をも含むものとして受取れる。鷗外の諦念（高瀬舟）は社会的にみて近代資本主義の魔術性に対する強力な批判抵抗として受取れるに対して、芥川のそれ（羅生門・鼻・芋粥）は近代の唯物論的革命

思想に対する批判抵抗として受取れる。その彼も「左手にはレーニン、右手にはキリスト」と半面に近代階級社会における階級闘争の歴史的必然性を早くも承認してゐたやうであるにも拘らず、人間のエゴイズムを核とする内部的諸因子を看過する彼らの楽天性に目を覆ふことができなかつたのである。しかし根本的に彼を苦しめつづけた道徳的懐疑主義が結局生の逃避に彼を導き、そのやうな文学性の指摘がマルキシズム陣営からおこり、「敗北の文学」[21]として規定されるに至つた悲劇は、日本の現代文学成長途上における真摯な知性的作家の典型的悲劇として同情に価する。

芥川のこの逃避的人生観・観照的人生態度は「虱」の構想にもはつきり反映してゐる。先駆者急進派の代表森と、偽善者保守派の代表井上との抗争を滑稽化し無意味化したことがまづその一つである。その結果人間は客観的に機械的自転力をもつて進行する社会の運行に冷静に身を託することを賢明とするかに見える。傍観的な人生観を示してゐることがその二つである。社会の先端に行動する彼等を社会の寄生物的醜悪、滑稽の典型として造形し批判した創作精神はまさにこの逃避的もしくは傍観的観照の精神によるのである。

更に作品的ニュアンスを比較するに、餓死直前のせつぱ詰つた盗奪を善悪一如的に一面認めた「羅生門」のそれには鬼気迫る虚無的絶望の暗愁が感ぜられる。秋風に吹かれる内供の長鼻には涙のにじむ作者の暗愁がうかゞはれる。しかるに船上に抗争する諸人物に無頓着な金毘羅船はあまりに非情である。「虱」のこのやうなニュアンスの非情化は作者の闘争厭悪、生逃避の意識がより一層理智的に冷静化したことを物語つてゐるよう。かなり渾然たる前二作に比べ、滑稽誇張の過剰性に加ふるにこのやうな主体性の冷凍化、燃焼の弱まりを示すこの作品は意図の面白さにも抱らず技巧に堕ち過ぎた憾があらう。思想的にもその余りに機械的な活動をしか見ない社会の設定は今日の有機的、ダイナミックな社会観からすれば非有機的非現実的な誇をまぬがれまい。これが芥川の社会観の限界といふのは早計であらうかもしれぬが、とにかくこの作品から受ける印象には右のやうな批判の余地が残されてゐる。たとへこのやうな社会設定は前述の如く、近代の物質的機械文明社会の寓意化であるとしても、人間の有機的構成体の本性を除去した解釈と表現にはある物足りなさを感ぜさせられる。もし作者によつてこの不満が克服されるとするなら、「虱」の構想は根柢から改変されずにはすむまい。その時、芥川の致命的な生の逃避、道徳の懐疑主義は一段と社会的ヒューマニズムの光をうけ、主体性を強化し、より現実的批判を孕む諷刺小説として登場するのではあるまいか。（人間の弱さに対する彼の美しい憐憫に加へて、人間の真の強さに対する積極的な共鳴が交響して。）それはもはや勝敗の一時性を超越した永遠的な文学といふべきものでもあらう。

（一九五三・一〇・五）

註1、現代中国小説集（中日文化研究所訳編）所収。一九四二年作。抗日反帝国主義文学。主人公日本より帰国した学生夫婦。背景漢口近くの揚子江上の船中。

2、中国文芸叢書（聖光社）所収。主人公田舎の青年升義。愛人である大家の下婢の身代金を得るため、身を売つて鉱山の金拙り（砂丁）となり空しく死んでしまふ悲劇的小説。

3、山田孝三郎「芥川文学事典」二二頁、「新思潮校正後に」参照。

4、岩上順一「歴史文学論」歴史の現代化の傾向。「芥川は、歴史を思想表現のための手段とした。歴史が小説的思想の内容でなく、その扮装、その傀儡と化した。言ひかへれば歴史を歪曲した。」（一九四頁）

5、全書、寓意化の陥穽、高瀬舟について。（一一〇頁）

6、日本随筆大成第三期第十二巻にも所収。

7、参考文献の一つとして「近代日本文学に於ける自然と道徳の問題についての史的考察」（唐木順三、近代日本文学史論）がある。

8、加田哲二、「社会史」（現代日本文明史第十一巻）第五篇、欧洲大戦時の日本資本主義。（二八二頁）

9、二三の思想的例として、幸徳秋水事件を機に無政府主義に触れた「食堂」（43）、社会政策、労資問題の考察、社会主義思想の説明をする大正八・九年の賀古鶴所宛書簡（鷗外全集第二十二巻）、古代社会と共産主義との関係考察の古い手帳から（大正10）など。

10、加田哲二、「社会史」、第五篇大正期における社会思想の潮流。（三三四頁）「大正三年頃からは近代的労働争議が頻発。」

11、日本の無政府主義＝アナルコ・サンヂカリズムの代表者は明治四三年死刑の幸徳秋水と大正十二年関東大震災に虐殺された大杉栄である。共産主義理論が無政府主義理論を大正十二年ころ完全に克服するまで日本の社会主義思想は大体アナキズムが中心。（社会主義講座Ⅵ、岸本英太郎、日本社会運動史等参照。）

12、わたしは不幸にも「人間らしさ」に礼拝する勇気は持ってゐない。いや、屢「人間らしさ」に軽蔑を感ずることは事実である。しかし又常に「人間らしさ」に愛を感ずることも事実である。愛を？—或は愛よりも憐憫かも知れない。（侏儒の言葉、人間らしさ。）

13、何びとも偶像を破壊することに異存を持ってゐるものはない。同時に又彼自身を偶像にすることに異存を持ってゐるものもない。（仝上、偶像。）

14、岩上順一「歴史文学論」、諦念の哲学二〇九頁—二一〇頁参照。

15、プルードン、「財産とは何ぞや」（新明正道訳）。「財産は盗奪である！」（第一章）

16、所謂生活力といふものは実は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。（或旧友へ送る手記）

17、芥川龍之介全集第七巻。

18、恒藤恭、「旧友芥川魚之介」（市民文庫）、友人芥川の追憶十三。

19、同上。

20、唐木順三「作家論」、芥川龍之介（二）。

21、宮本顕治、敗北の文学（昭和四年八月改造発表）。

—— 相愛女子大学教授 ——